

第2章

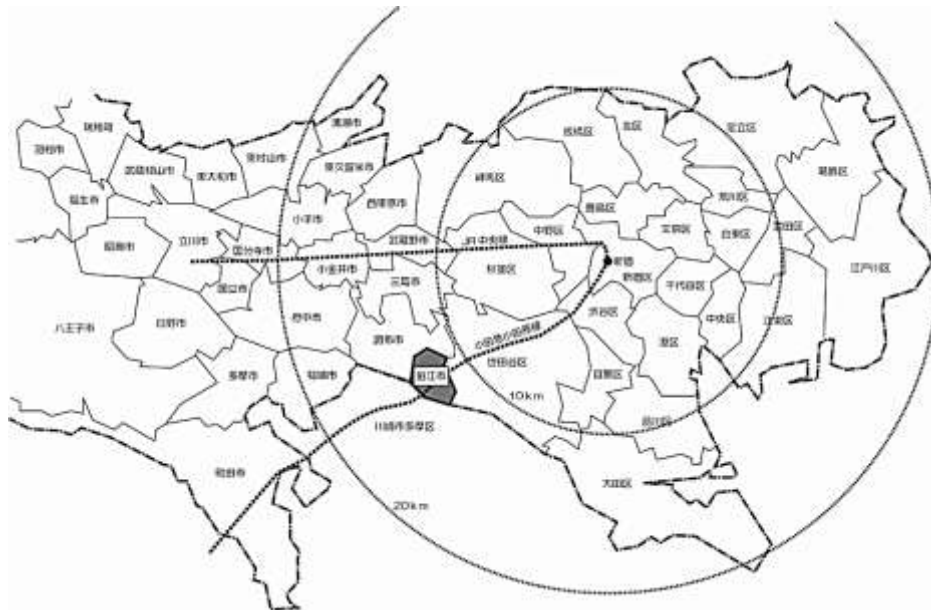
生物多様性と狛江市の自然

2.1 社会的側面から見た特性

1) 位置

狛江市は、武蔵野台地の南端、多摩川の左岸に位置しています。市のほぼ中央を走る小田急線で新宿から20～30分と利便性が高く、東は世田谷区、西及び北は調布市、南は多摩川をはさんで神奈川県川崎市に接しています。多摩川河口から22kmにあり、標高は20mです。

市域は大部分が平坦で、多摩川に向かって台地上はゆるやかに傾斜しています。東西2,940メートル、南北3,660メートル、面積6.39km²と、島嶼部を除く東京都の自治体で最も面積が小さく、コンパクトなまちです。

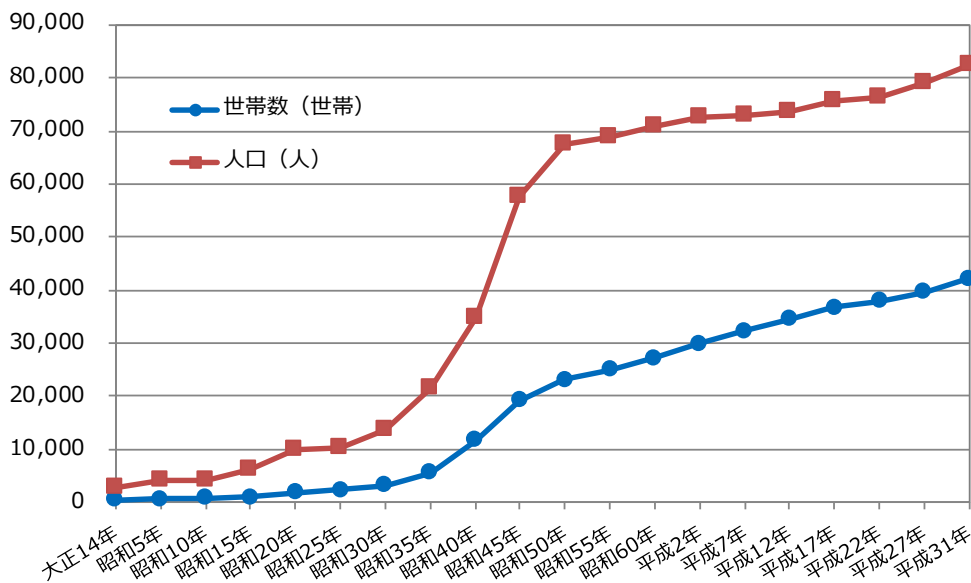


出典：「狛江市都市計画マスタープラン」

図 2.1 狛江市の位置

2) 人口

平成31(2019)年1月1日現在、狛江市の人口は82,481人、世帯数42,157世帯となっています。高度経済成長期に急激に人口が増加し、その後はゆるやかな増加傾向が続いており、また、多摩26市のなかでも人口密度の高い市となっています。一方で、少子高齢化が進行しており、将来的には減少傾向に転じると推測されています。

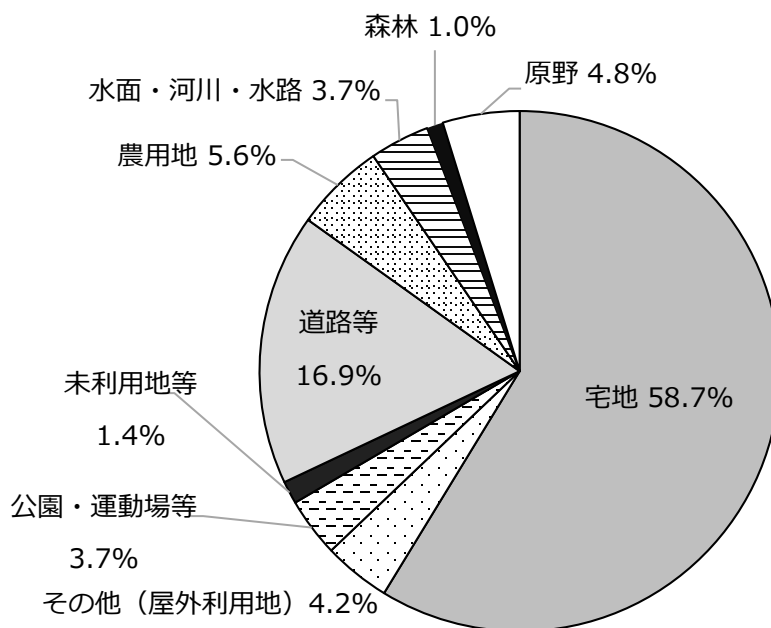


出典：「統計こまえ」

図 2.2 狛江市の人口・世帯数の推移

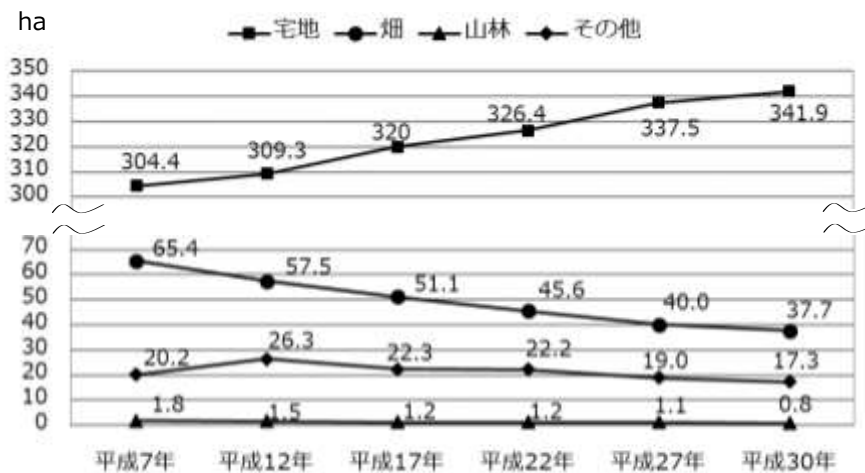
3) 土地利用

平成 29(2017)年の地目別の土地利用状況は、58.7%が宅地として利用されており、道路の 16.9%とあわせると、75.6%と約 8 割が人工的な利用となっています。一方で、森林は 1.0%と僅かで、農用地 5.6%、水面・河川・水路の 3.7%とあわせても 1 割程度となっています。



出典：「東京の土地利用 平成 29年多摩・島しょ地域」より作成

図 2.3 狛江市の土地利用



出典：「統計こまえ」

図 2.4 地目別面積の推移

4) 産業

自然環境に関わりの深い産業としては、農業と造園業があります。

<農業>

かつては市全域に広く水田や畑が広がっていましたが、現在は水田はなく、畑地も減少傾向が続いています。しかし、都心からの地の利を活かし、枝豆・トマト・小松菜等の野菜、カキ・ブルーベリー等の果樹、切り花・球根・鉢もの等の花き類等が生産されているほか、養蜂等も行われています。また、狛江市独自の生産工程管理手法により安心・安全でおいしい『狛江ブランド農産物』の確立をはかっています。



ブランドの目印「おべじちゃん」マーク

<造園業>

狛江市内には 30 近くの造園業者があり、樹木・花きの植栽・管理に関する市民からの相談にのる等、市内の緑の育成・管理に協力しています。

泉龍寺には、狛江造園組合が昭和 45 (1970) 年に建立した「草木供養塔」があります。これは、伐採や除草等の造園作業を通じて殺生を行っている草木の供養を行うとともに、草木をはじめとする自然の恵みに感謝して建立された石碑です。組合では毎年 4 月上旬に供養祭を行っています。



泉龍寺境内の「草木供養塔」

5) 歴史文化

狛江市の南を流れる多摩川の川底からはハマグリ（ハマグリ）の群れが化石として発見されており、昔、市全体が多摩川の河口であったことがわかっています。また、市内からは多くの縄文土器や石器類が発掘されているほか、古代の有力者の墳墓である古墳が多く残され「狛江古墳群」と呼ばれています。現在は樹林等に覆われている古墳も多く、生きものにとっても貴重なよりどころとなっていると推測されます。



都指定史跡「兜塚古墳」



六郷さくら通り沿いの「経塚古墳」

江戸時代の狛江市は、畑地や水田の多い農村でした。重要な水源として、慶長 16（1611）年に開削された灌漑用水路である六郷用水、昔の野川、弁財天池から流れる清水川等のほか、昭和 30 年代頃までは湧水等の豊かな水源を活かした小川が水田の間を流れ、家の前の小川で野菜を洗う等、のどかな風景が広がっていました。米や麦のほかには果樹の栽培、養蚕が行われ、副業として多摩川での漁業も行われていました。

昭和 2（1927）年に小田急線が開業して沿線の宅地化が進み、更に戦後の高度経済成長期の急激な市街地化の進行によって人口も急増しました。

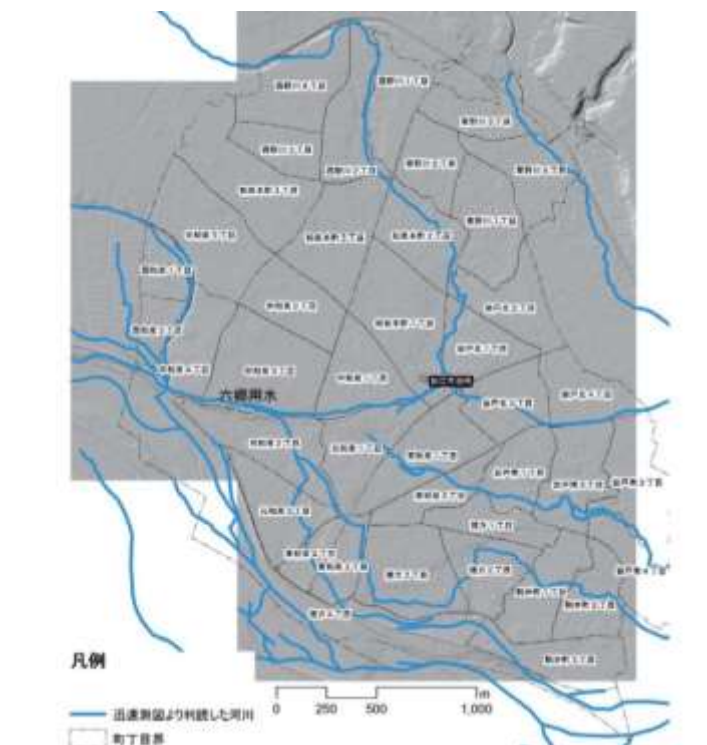


図 2.5 迅速測図（明治 14 年）から見た河川・水路

出典：「狛江市緑の基本計画」



西河原の耕地
(現在の西河原公園付近)
昭和 40 (1965) 年頃



旧野川
(現在の野川緑道・和泉本町 2 丁目付近)
昭和 40 (1965) 年頃

【コラム】江戸時代から人気スポット！ ～泉龍寺～

天保 5～7 (1834-36) 年に、斎藤幸雄・幸孝・幸成の親子 3 代で完成させた絵入りの江戸地誌「江戸名所図会」には、江戸とその近郊の神社・仏閣・名所・旧跡が紹介されており、狛江市の泉龍寺も紹介されています。

江戸時代から、泉龍寺は江戸市民憩いの人気スポットだったのかも？



江戸名所図会『泉龍寺』



←江戸名所図会『和泉村 霊泉』

奈良時代に干ばつが起きた際、良弁僧正が雨乞いをした折に湧き出したと言われている「弁財天池」は、昭和 30 年代までは豊かなわき水があり、周辺の水田を潤していました。「和泉」という地名の由来にもなっています。



現在の弁財天池
(平成 29(2017)年
10 月撮影)

2.2 自然環境から見た特性

1) 広域的な位置づけ

狛江市は、多摩川流域（国土交通省管轄）と野川流域（東京都管轄）に位置しており、水の流れや河川沿いの空間を通じて自然環境としてのつながりを持っています。

それぞれの関係機関とともに「多摩川流域協議会」「野川流域連絡会」に参加し、連携をはかっています。



出典：「水辺を歩こう多摩川ガイド&ハンドブック 2004」国土交通省関東地方整備局京浜河川事務所

図 2.6 多摩川流域と狛江市の位置



出典：「野川流域河川整備計画」東京都

図 2.7 野川流域と狛江市の位置

2) 空から見た狛江市

航空写真で見ると、市内で最もまとまった規模の自然環境である多摩川が市の南端を流れています。市北端を流れる野川沿いやかつての水路跡を活用した野川緑道や岩戸川緑道が細いながらも線状に続く緑となっています。また、多摩川沿いの西河原公園・西河原自然公園、狛江駅前の狛江弁財天池特別緑地保全地区が比較的まとまった緑として空からも確認できます。



図 2.8 航空写真（平成 30（2018）年 5 月 21 日撮影）

3) 緑被の分布

平成 30 (2018) 年度の緑の実態調査によると、狛江市の緑被面積は 155.39ha、緑被率*は 24.32%でした。樹木被覆地が 13.49%、草地が 5.17%、農地が 5.57%で、屋上緑化を除き、いずれも平成 22 (2010) 年度調査時より減少傾向にあります。

表 2.1 狛江市内の緑被

項目	平成 22 年度		平成 30 年度	
	面積(ha)	割合(%)	面積 (ha)	割合(%)
緑被地	166.48	26.05	155.39	24.32
樹木被覆地	89.74	14.04	86.23	13.49
草地	37.81	5.92	33.04	5.17
農地	38.59	6.04	35.59	5.57
屋上緑化	0.33	0.05	0.53	0.08
裸地	25.17	3.94	21.53	3.37
水面	8.77	1.37	10.97	1.72

※掲載の数値は集計の際、少数第 3 位を四捨五入しているため合計値があわない場合があります。

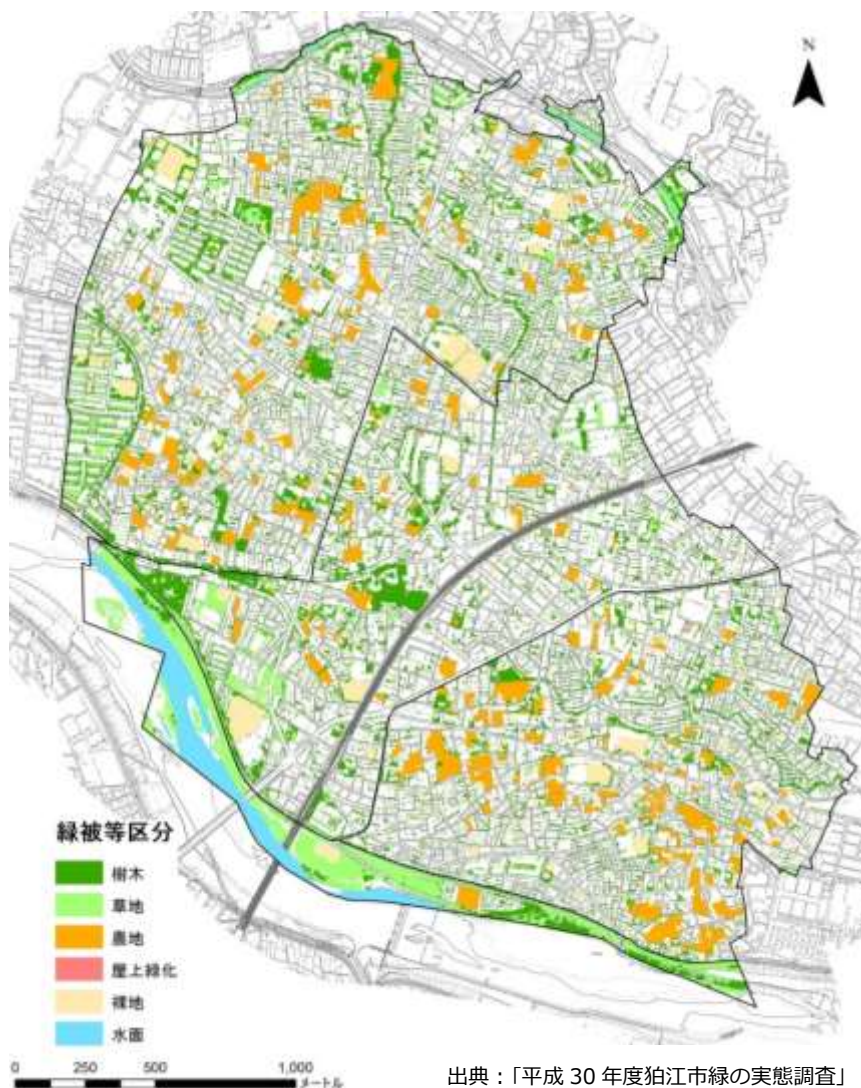


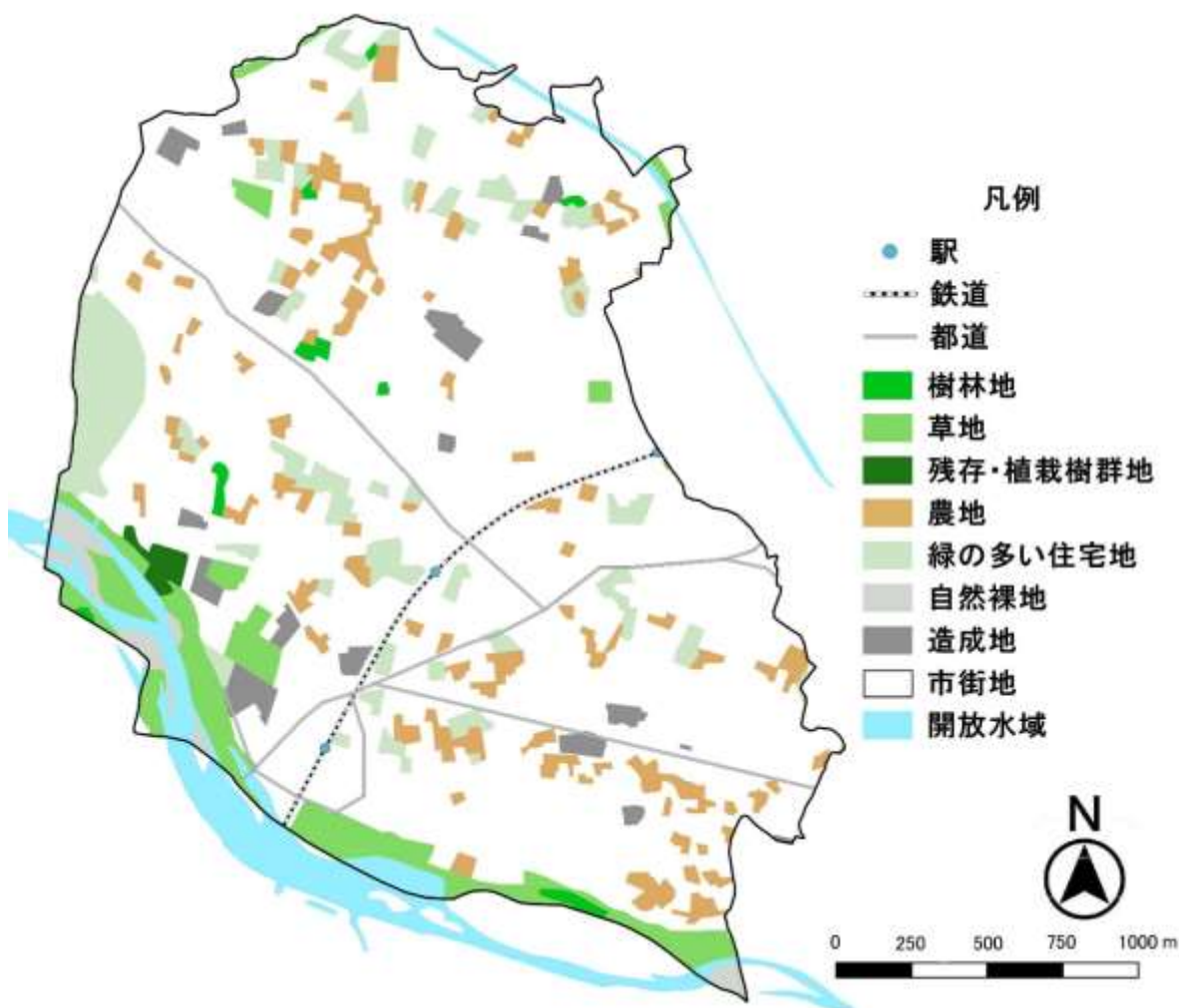
図 2.9 狛江市の緑被分布

※「*」の付いた用語は、資料編に用語解説を掲載しています。

4) 植生

市街地化が進んでいる狛江市の植生は、まとまった樹林地は少なく、市全域に「緑の多い住宅地」や「農地」が点在しています。泉龍寺を含む『狛江弁財天池特別緑地保全地区』は「緑の多い住宅地」として区分されています。

まとまった植生としては、多摩川沿いの河川敷や堤防法面の「草地」があるほか、西河原公園・西河原自然公園一帯が「残存・植栽樹群地」となっています。西河原公園は、多摩川の河川敷だった場所を買収して整備された公園で、昭和 51 (1976) 年の開園から 40 年余が経過し、コナラ、クヌギ、シラカシ等の樹木が良好な緑地を形成しています。



出典：「第 6・7 回自然環境保全基礎調査植生調査報告書」(環境省生物多様性センター)
※1/25,000 植生図「溝口」GIS データ(環境省生物多様性センター)を使用し作成・加工したもの。(http://www.biodic.go.jp/)

図 2.10 狛江市の植生

5) 生息・生育が確認されている動植物

狛江市では、平成 29（2017）年夏から平成 30（2018）年春にかけて、市内の主な自然拠点等に生息・生育する動植物を調べる自然環境調査を行いました。その結果、918 種の動植物が確認されました。このうち、国又は東京都のレッドデータブック（RDB）^(p94) で希少種に指定されている生きものが 67 種、外来種*が 154 種確認されました。私たちの身近にも多くの生きものたちが暮らしていることが確認されています。

表 2.2 分類群ごとの確認種数

分類群	総数	希少種	外来種
植物	500	23	124
哺乳類	9	1	1
鳥類	63	24	3
両生類	4	2	1
爬虫類	8	6	1
昆虫類	314	6	20
水生生物	20	5	4
合計	918	67	154

※調査時期等：春夏秋冬に各 1 回ずつ、市内の主な自然拠点等 10 地点で実施。

※東京都 RDB の地域区分において狛江市は「北多摩」地域に区分されます。

※植物は、人為的に植栽されている種、園芸種も含む。

※多摩川の本流は調査対象外。

調査結果から、以下のような特性が確認されました。

■ 希少種から見た狛江市の自然

今回の調査で確認された 918 種の生きもののうち、67 種が希少種でした。67 種の希少種が生息できる環境が、まだ残されているともいえますが、メダカやアマガエルのように、かつて普通に身近で見ることのできた生きものが、生息環境の消失・悪化等で減少し希少種として指定されています。今以上に緑地や水辺の減少が進むと、急激に生きものの種類や数が減少してしまう恐れがあるため、気を付ける必要があります。

市内でも希少種の確認が多かった場所は、多摩川（狛江水辺の楽校^(p69) 付近）でした。狛江市で確認された鳥類の希少種 24 種のうち 21 種が多摩川で確認されており、12 種は多摩川だけで確認されています。昆虫類でも、希少種 6 種のうち 4 種が確認されており、4 種とも多摩川だけで確認されています。多摩川は、確認種の総数も他の調査地点を大きく離して最も多く、狛江市の自然環境にとって非常に重要な場所だといえます。多摩川は、まとまった面積の緑・水辺が残されていること、上下流域との空間としての連続性があること、そして、陸地と様々な条件の水辺環境があることが、多様な生きものの生息を可能にしていると考えられます。

※「*」の付いた用語は、資料編に用語解説を掲載しています。



メダカ (※)



ニホンアマガエル

(※) 日本のメダカにはキタノメダカとミナミメダカの2種があり、狛江市にはミナミメダカが分布。

■多くの外来種*を確認

狛江市には本来生息・生育していない「外来種」が154種と非常に多く確認されました。外来種は、人間活動に伴って持ち込まれることが多いため、外来種が多く確認されるのは都市部に共通した傾向となっています。

人に飼われていたペットの逃亡等で野生化したワカケホンセイインコが市内各地で確認されたほか、多摩川・野川等の水辺では、アレチウリやオオフサモ、ウシガエル等、外来種のなかでも特に生態系を損ねたり、人の生命・身体、農林水産業に被害を与えたりする「特定外来生物」*が多く確認されています。



ワカケホンセイインコ



アレチウリ



ウシガエル

■猛禽類*・哺乳類も確認

食べる・食われるという関係でつながる生態系の頂点に立つ動物として、ツミやチョウゲンボウといった猛禽類（タカやハヤブサ、フクロウの仲間）や、ホンドイタチ、ホンドタヌキ等の哺乳類が確認されています。これらの動物の餌となる多くの小動物や昆虫が生息し、安心・安全に移動・繁殖できる自然環境が、狛江市やその周辺に残されていると考えられます。



チョウゲンボウ (オス)



ホンドタヌキ

※「*」の付いた用語は、資料編に用語解説を掲載しています。

【コラム】「河原」の環境を必要とする生きものたち

狛江市で生息が確認されている「カワラバッタ」は、名前のとおり大きめの石（礫：れき）がごろごろしている河原にすむバッタの仲間で、周りに溶け込む灰色のまだら模様をしています。

カワラバッタが生息する礫（れき）河原は、川の水流によって頻繁にかく乱されることで維持されていますが、近年では、洪水対策が進んだことによってかく乱が減少し、礫河原の減少とともにカワラバッタも減っています。



カワラバッタ



植物がまばらに生える礫河原

6) 自然拠点ごとの特性

平成 29 (2017) 年度から平成 30 (2018) 年度にかけて実施した自然環境調査では、生物多様性の拠点となっていることが推測される、まとまりやつながりのある樹林地・水辺等 8 箇所と、市域における典型的な環境である「緑の多い住宅地」と「農地の多い地区」の 2 箇所について調査を行いました。(下図参照)

次頁以降、場所ごとに確認された種数、希少種の種数を示すとともに、主な自然拠点ごとに確認された自然環境の特性と主な確認種を示します。

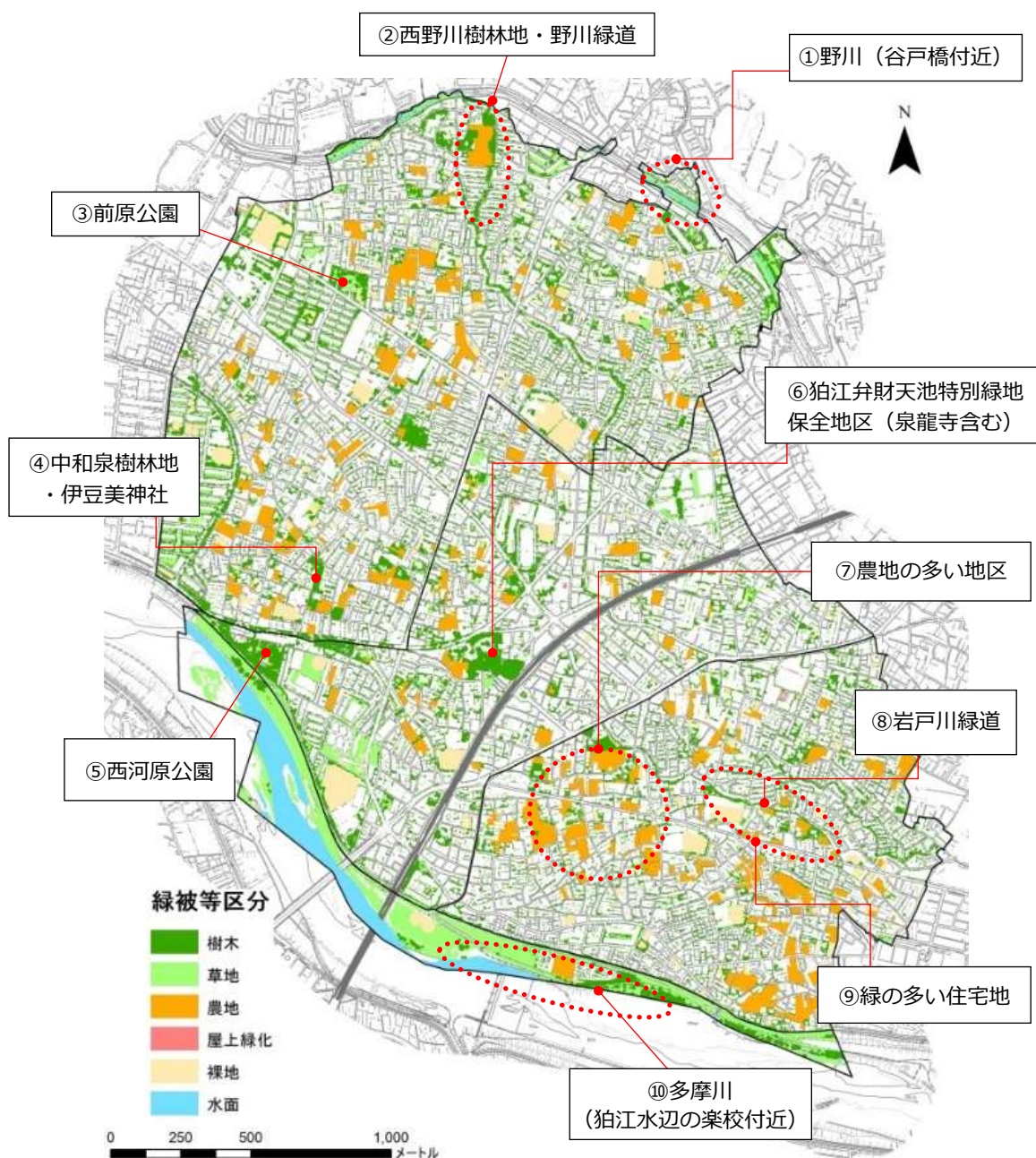


図 2.11 調査を行った主な自然拠点等

表 2.3 自然拠点ごとの確認種数

調査地点	植物	哺乳類	鳥類	両生類 爬虫類	昆虫類	水生動物	計
野川 (谷戸橋付近)	141	4	26	4	135	12	322
西野川樹林地 野川緑道	154	6	17	3	90	-	270
前原公園	166	5	11	6	104	7	299
中和泉樹林地 伊豆美神社	117	4	7	1	88	-	217
西河原公園	79	4	17	3	87	-	190
狛江弁財天池特別 緑地保全地区	177	6	17	5	111	8	324
農地の多い地区	80	4	13	0	61	-	158
岩戸川緑道	162	3	13	1	93	-	272
緑の多い住宅地	111	2	8	0	39	-	160
多摩川 (狛江水辺の楽校付近)	161	7	54	8	199	13	442
総種数	500	9	63	12	314	20	918

※植物は、人為的に植栽されている種、園芸種も含まれます。

表 2.4 自然拠点ごとの確認希少種数

調査地点	植物	哺乳類	鳥類	両生類 爬虫類	昆虫類	水生動物	計
野川 (谷戸橋付近)	3	1	6	2	0	3	15
西野川樹林地 野川緑道	6	0	5	3	0	-	14
前原公園	7	0	1	2	1	2	13
中和泉樹林地 伊豆美神社	1	0	0	1	0	-	2
西河原公園	0	0	4	3	0	-	7
狛江弁財天池特別 緑地保全地区	4	0	2	3	1	1	11
農地の多い地区	0	0	2	0	0	-	2
岩戸川緑道	3	0	2	1	1	-	7
緑の多い住宅地	0	0	0	0	0	-	0
多摩川 (狛江水辺の楽校付近)	5	1	21	5	4	4	40
総種数	23	1	24	8	6	5	67

※水生動物の調査は野川、前原公園、狛江弁財天池特別緑地保全地区、多摩川のみで実施。

野 川 (調査地①)



野川 (谷戸橋付近)



瀬切れの状況

<特性>

- ・ 沿道と水辺の高低差は大きいですが、高水敷には植物も多く、河道のなかで流れが蛇行している部分があり、瀬や淵等、水深や水の流れる速さに変化がみられる。
- ・ ホンドイタチ、アズマモグラ等の哺乳類、アオダイショウ、ニホンカナヘビ等の爬虫類のほか多くの生きものが確認されており、多くの生きもののよりどころとなっているほか、移動経路としても使われていると推測される。
- ・ カワセミが年間を通じて確認されており、世田谷区や調布市内の崖線・斜面林等と行き来して一体的に利用している可能性がある。
- ・ 川と海を移動し水域間の連続性を必要とするモクズガニが生息している。
- ・ 河川沿いを散歩、ジョギングする人が多く、野川の存在が地域住民にとっての癒しや快適性、住環境としての魅力を高める役割も担っている。
- ・ 水辺を好む植物が少なく、アレチウリ、セイバンモロコシ、ワルナスビ等の外来植物が多い。特にアレチウリは広範囲に繁茂している。
- ・ ウシガエル、ミシシippアカミミガメ等の外来種*が生息している。
- ・ 夏場に水が少なくなり、流れが途切れる「瀬切れ」を生じることがある。

表 2.5 野川で見られた主な生きもの ※自然環境調査 (p20-24 参照) 結果より抜粋

植 物	アカメガシワ、ノイバラ、イヌワラビ、ツルボ、オオブタクサ※、アレチウリ※、カナムグラ、ナワシロイチゴ、ヨモギ、ヤナギタデ、オランダガラシ※、オオカワヂシャ※、ヨシ、オギ、ススキ、クサヨシ、ノゲシ、ヘビイチゴ、ワレモコウ、ヒメガマ、セリ、ヒルガオ、ノアサガオ※、セイトカアワダチソウ※ ほか
哺乳類	アズマモグラ、ホンドイタチ★
鳥 類	カルガモ、オナガガモ、コガモ、キジバト、カワラバト※、カワウ、アオサギ、コサギ★、イソシギ★、カワセミ★、モズ★、ハシボソガラス、ハシブトガラス、シジュウカラ、ヒヨドリ、メジロ、ムクドリ、ツグミ、ジョウビタキ、スズメ、キセキレイ、ハクセキレイ、セグロセキレイ★、カワラヒワ、アオジ
爬虫類	ミシシippアカミミガメ※、ニホンカナヘビ★、アオダイショウ★
両生類	ウシガエル※
昆虫類	ハグロトンボ、シオカラトンボ、アオマツムシ※、ショウリョウバッタ、コバネイナゴ、オオカマキリ、アメンボ、クサカゲロウ、キボシカミキリ※、ジャコウアゲハ、アオスジアゲハ、ヒメアカタテハ、キアシナガバチ、ニホンミツバチ、セイヨウミツバチ※ ほか
水生動物	コイ※、ギンブナ、モツゴ、スミウキゴリ、スジエビ、アメリカザリガニ※、モクズガニほか

★東京都レッドデータブック掲載種/※外来種

※「*」の付いた用語は、資料編に用語解説を掲載しています。

保存樹林地

西野川樹林地（調査地②）・中和泉樹林地（調査地④）



西野川樹林地



中和泉樹林地

<特性>

- ・ 市内における貴重な緑地であり、生きもののよりどころとして重要な場となっている。各樹林地の規模は小さくなく、隣接する社寺林や緑道、農地等とのまとまり、つながりがあることが生きものの生息・移動にとって重要である。
- ・ 林床の落ち葉が肥沃な土壌をつくっており、アズマモグラが生息する。
- ・ 猛禽類*や、オナガ等が営巣できる高木が存在する。
- ・ ヒガシニホントカゲ等の爬虫類の生息が確認されている。
- ・ 樹林地によっては、中低木が少なく、常緑樹を含む高木が密生し下草のない暗い樹林となっており、生きものの多様性が低くなっている。

表 2.6 西野川・中和泉樹林地で見られた主な生きもの

※自然環境調査（p20-24 参照）結果より抜粋

植 物	ケヤキ、アカマツ、アカメガシワ、アオキ、ヤブツバキ、エノキ、ムクノキ、トウネズミモチ※、シラカシ、コナラ、サンショウ、ヤブミョウガ、キツタ、アケビ、ヤブラン、カニクサ、ヤツデ、ヨウシュヤマゴボウ※、マダケ※、ナンキンハゼ※ ほか
哺乳類	アズマモグラ、ホンドタヌキ
鳥 類	キジバト、カワラバト※、コゲラ、ハシブトガラス、ハシボソガラス、ヒヨドリ、ワカケホンセイインコ※
爬虫類	アオダイショウ★、ヒガシニホントカゲ★、ニホンカナヘビ★
昆虫類	エンマコオロギ、カネタタキ、アブラゼミ、ツクツクボウシ、ミンミンゼミ、ウスバカゲロウ、カブトムシ、イカリモンガ、クロアゲハ、ヒカゲチョウ、クロコノマチョウ※、セイウミツバチ※

★東京都レッドデータブック掲載種／※外来種

※「*」の付いた用語は、資料編に用語解説を掲載しています。

緑 道

野川緑道（調査地②）・岩戸川緑道（調査地⑧）



野川緑道



岩戸川緑道

<特性>

- ・ 高木・中低木等多様な種が植栽され、住宅地のなかを線状に伸びる貴重な緑地となっており、野草も生育している。野生の動物にとっての重要な生息空間であり移動経路となっている。
- ・ チョウ類の食草や蜜源となる植物が少ないこともあり、確認された昆虫類の種数・個体数は多くない。
- ・ 園芸植物や外来植物が多く植栽されているほか、希少種も一部で植栽されており、地域の生態系に悪影響を及ぼす種の植栽回避、在来種*の保全・活用に留意が必要である。
- ・ 多くの人々が利用するエリアであり、人にとっての安心・安全と、野生の生きものの生息・生育空間とのバランスのとれた維持管理が必要である。
- ・ 一部でせせらぎが創出されているが、構造が人工的で水生生物は殆ど確認されていない。

表 2.7 野川緑道・岩戸川緑道で見られた主な生きもの

※自然環境調査（p20-24 参照）結果より抜粋

植 物	サングジュ、ハリエンジュ※、ヒイラギナンテン※、フジ、カラスウリ、ミズヒキ、ヤブガラシ、オオバコ、セイヨウタンポポ※、ドクダミ、カタバミ、ヘクソカズラ、クズ、オニノゲシ※、ノビル、ノハカタカラクサ※、ヤブカンゾウ※、ハナダイコン※（ほか）
哺乳類	アズマモグラ
鳥 類	キジバト、カワラバト※、ツミ★、ワカケホンセイインコ※、オナガ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、シジュウカラ、ツバメ、ヒヨドリ、ウグイス★、エナガ★、メジロ、ムクドリ、シロハラ、ジョウビタキ、スズメ、ハクセキレイ
爬虫類	ヒガシニホントカゲ★、ニホンカナヘビ★
昆虫類	ツツレサセコオロギ、アオマツムシ※、ショウリョウバッタ、ハラビロカマキリ、ミンミンゼミ、アブラゼミ、クロアゲハ、ナガサキアゲハ※、アゲハ、セグロアシナガバチ（ほか）

★東京都レッドデータブック掲載種／※外来種

※「*」の付いた用語は、資料編に用語解説を掲載しています。

公 園

前原公園（調査地③）・西河原公園（調査地⑤）



前原公園のトンボ池



西河原公園

<特性>

- ・ 多くの市民が訪れ、身近で自然とふれあうことができる場所となっている。西河原公園は子どもたちの自然体験の場としても活用されている。
- ・ 池が創出されており、カエルやトンボ等が確認されている。
- ・ 維持管理で発生した剪定枝や落ち葉を溜め、堆肥化やチップ化による公園管理への活用が行われている。堆積された場所は、昆虫や爬虫類等の小動物が生息する場所（エコスタック*）にもなっている。
- ・ 人の利用によって土が踏み固められている場所が多い。
- ・ キンギョや飼育品種のメダカ等が池に放流されることがある。
- ・ 西河原公園の池底はコンクリートで、たまった落葉等も水の管理作業の際に除去されるため水生植物の生育がない。ヤゴやカエルの卵・オタマジャクシ等の水生動物は隠れ場所がないため、自然の池よりも野鳥等に捕食されやすくなっている。

表 2.8 前原公園・西河原公園で見られた主な生きもの

※自然環境調査（p20-24 参照）結果より抜粋

植 物	コナラ、クヌギ、エゴノキ、ネムノキ、ヘビイチゴ、ワレモコウ、ヒメガマ、ドクダミ、カタバミ、セイヨウタンポポ※、ヒメジョオン※、ハルジオン※、オギ、ミゾソバ、キショウブ※、オオハングウソウ※、アマゾントチカガミ※、オモダカ、ヤブラン ほか
哺乳類	アズマモグラ
鳥 類	キジバト、カワラバト※、カルガモ、コゲラ、モズ★、オナガ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、シジュウカラ、ヒヨドリ、エナガ★、メジロ、ムクドリ、ツグミ、スズメ、セグロセキレイ★、トビ★
爬虫類	ミシシippiaカミミガメ※、ニホンカナヘビ★、ヒガシニホントカゲ★
両生類	アズマヒキガエル、ニホンアマガエル★、ウシガエル※、ニホンアカガエル★
昆虫類	オオアオイトトンボ、クロスジギンヤンマ、マユタテアカネ、ミツカドコオロギ、コバネイナゴ、ショウリョウバッタ、オオカマキリ、クマゼミ※、ツクツクボウシ、アメンボ、カブトムシ、ヨツボシテントウ、ハイイロゲンゴロウ、クロアゲハ、ジャコウアゲハ、アカボシゴマダラ※、コガタスズメバチ ほか
水生動物	メダカ（飼育品種）、キンギョ（改良品種）、アメリカザリガニ※、マルタニシ☆

☆環境省レッドデータブック掲載種／★東京都レッドデータブック掲載種／※外来種

※「*」の付いた用語は、資料編に用語解説を掲載しています。

社寺林

伊豆美神社（調査地④）・泉龍寺（調査地⑥）



伊豆美神社



泉龍寺

<特性>

- ・ 地域の歴史文化資源でもある社寺と一体となった樹林地は、生きものにとっての重要な生息環境であり、狛江市の重要な自然環境となっている。
- ・ 樹齢を重ねた高木が残されており、林床では日陰を好む植物も生育している。
- ・ シジュウカラやコゲラ、スズメ等多くの鳥類が確認されている。
- ・ 維持管理で発生する枝葉の堆積場所では、朽木や落葉の下、枝葉のすき間等を好む昆虫類やカナヘビ等の小動物が生息している。
- ・ 境内の草地では、コオロギやバッタ、カマキリの仲間等も確認されているほか、花の咲く種の周辺ではチョウ類やハチ類も多く確認されている。

表 2.9 伊豆美神社・泉龍寺で見られた主な生きもの

※自然環境調査（p20-24 参照）結果より抜粋

植 物	スギナ、イヌワラビ、ヤブラン、アケビ、ノブドウ、ケヤキ、ムクノキ、マグワ※、コナラ、シラカシ、ヨウシュヤマゴボウ※、マンリョウ、ヘクソカズラ、ヒメジョオン※、キツタ、フキ、カントウタンポポ、セイヨウタンポポ※、タチツボスミレ、ヤマユリ
哺乳類	アズマモグラ
鳥 類	シジュウカラ、コゲラ、ウグイス★、エナガ★、オナガ、スズメ、ヒヨドリ、キジバト、ハシボソガラス、ハシボソガラス、ワカケホンセイインコ※
爬虫類	ヒガシニホントカゲ、ニホンカナヘビ★
昆虫類	エンマコオロギ、アオマツムシ※、オンブバッタ、ハラビロカマキリ、アブラゼミ、ミンミンゼミ、ツクツクボウシ、エサキモンキツノカメムシ、ナミテントウ、クロアゲハ、ナガサキアゲハ※、ヒカゲチョウ、コガタスズメバチ、セイヨウミツバチ※、オオハラナガツチバチ ほか

★東京都レッドデータブック掲載種／※外来種

（境内は私有地です。参拝等の目的以外で立ち入ったり、断りなく動植物を採取したりしないようご注意ください。）

狛江弁財天池特別緑地保全地区（市管理エリア）（調査地⑥）



<特性>

- ・ 貴重なまとまった緑地として特別緑地保全地区に指定されている。市民グループにより、市管理エリアの維持管理、生きもの調査、開放日の運営が行われている。
- ・ 狛江駅前位置し、樹陰や枝葉のゆれる音、季節ごとの虫や鳥の鳴き声等、通勤通学や買い物等、日常的に癒しや潤いを市民にもたらしている。
- ・ 敷地内の池は、カルガモ等の休息地となっているほか、ヒバカリ、ヒガシニホントカゲ等も生息しており、餌となる小動物が多く生息していると推測される。
- ・ 地域にとって重要な自然環境となっており、かつて屋敷林として植栽されたと推測される植物が多くみられる。
- ・ 樹木が大きく成長して林床が暗い場所が多く、昆虫類の確認種は少ない。
- ・ 水源が雨水と地下水揚水のため、渇水時に池が干上がることがある。
- ・ ハクビシン、ミシシippアカミミガメ、ウシガエル、アメリカザリガニ、ワカケホンセイインコ、セイヨウキツタ等、多くの外来種*が確認されている。

表 2.10 狛江弁財天池特別緑地保全地区（市管理エリア）で見られた主な生きもの

※自然環境調査（p20-24 参照）結果より抜粋

植 物	ケヤキ、エノキ、ムクノキ、シラカシ、コナラ、ミズキ、アカマツ、コブシ、アオキ、サンショウ、ヤブツバキ、キツタ、ヤブラン、アズマネザサ、ミズヒキ、ノイバラ、クズ、スイカズラ、アケビ、ヤブミョウガ、モウソウチク※、ヨシ ほか
哺乳類	アズマモグラ、ハクビシン※、クマネズミ
鳥 類	マガモ、カルガモ、カワラバト※、キジバト、コゲラ、ワカケホンセイインコ※、オナガ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、シジュウカラ、ツバメ、ヒヨドリ、ウグイス★、エナガ★、メジロ、シロハラ、アオジ
爬虫類	ヒガシニホントカゲ★、ニホンカナヘビ★、ヒバカリ★、ミシシippアカミミガメ※
両生類	ウシガエル※
昆虫類	アキアカネ、クビキリギス、モリオカメコオロギ、アオマツムシ※、アオバハゴロモ、アブラゼミ、ミンミンゼミ、ツクツクボウシ、アメンボ、ヤマトヒメカゲロウ、ダンダラテントウ、クロアゲハ、アカボシゴマダラ※、オオハラナガツチバチ ほか
水生動物	コイ、アメリカザリガニ※ ほか

★東京都レッドデータブック掲載種／※外来種

※「*」の付いた用語は、資料編に用語解説を掲載しています。

農地の多い地区（調査地⑦）



<特性>

- ・ 農地やその周縁の樹木・生け垣や土壤中に生息する小動物を餌とする鳥類が複数種確認されており、生きものにとっての貴重な生息環境となっている。
- ・ 生物相は豊かではなく、哺乳類・爬虫類・両生類で確認できた在来種*はアズマモグラ1種のみであった。
- ・ 農地周縁に植えられた柑橘類等では、その葉を食べるアゲハ類の幼虫も確認されている。
- ・ ハクビシン（外来種*）、カラス類（在来種）等による農作物への食害が発生している。
- ・ 後継者不足や相続等によって農地が年々減少している。

表 2.11 農地の多い地区で見られた主な生きもの

※自然環境調査（p20-24 参照）結果より抜粋

植 物	ヘクソカズラ、セイヨウタンポポ※、ヒメムカシヨモギ※、ツユクサ、ヤブガラシ、シロツメクサ※、ヒメジョオン※、イヌワラビ、ハハコグサ、ナズナ、ツユクサ、ハキダメギク※、ノビル、ヒガンバナ※、スギナ、ホトケノザ、ノブドウ ほか
哺乳類	アズマモグラ、ハクビシン※
鳥 類	キジバト、コチドリ★、モズ★、ハシボソガラス、ハシブトガラス、シジュウカラ、ヒヨドリ、ムクドリ、スズメ、メジロ、ツグミ、ハクセキレイ
昆虫類	ウスバキトンボ、シオカラトンボ、エンマコオロギ、アオマツムシ※、オンブバッタ、ハラビロカマキリ、オオカマキリ、アブラゼミ、ミンミンゼミ、ヤノナミガタチビタムシ、ナミテントウ、アゲハ、モンシロチョウ、コムスジ、セグロアシナガバチ ほか

★東京都レッドデータブック掲載種／※外来種

（農地は私有地です。断りなく立ち入らないようご注意ください。）

※「*」の付いた用語は、資料編に用語解説を掲載しています。

緑の多い住宅地（調査地⑨）



<特性>

- ・ 生け垣や個人宅敷地内の樹木、遊歩道の脇の非舗装部分の草地、ポケットパークに植栽された樹木等が、生きものにとっての貴重な生息空間となっている。
- ・ カネタタキ等の鳴く虫、草地を利用するバッタ類、花の咲く草木に吸蜜に訪れるチョウ類等の昆虫類や、シジュウカラやヒヨドリ、ムクドリやカラス類等の鳥類が確認されている。
- ・ 庭にミカン等柑橘類を植栽している住宅では、アゲハ類がよく観察されている。石垣がある場所では、石のすき間に植物が生育したり、すき間が小動物の生息場所として利用されている。
- ・ 住宅間に残されているかつての水路や、非舗装の駐車場の草地等も、生きものにとって貴重な生息空間となっている。
- ・ 植物は主として人為的な植栽に頼り、空間としても多様性に欠けるため、都市化の進んだ地域でも生息可能な生きものは確認されているものの、その種類は限定されており個体数も少ない。

表 2.12 緑の多い住宅地で見られた主な生きもの

※自然環境調査（p20-24 参照）結果より抜粋

植 物	エゴノキ、ヘクソカズラ、ドクダミ、カタバミ、ツユクサ、ハルジオン※、セイヨウタンポポ※、ツタ、ノイバラ、ユウゲショウ※、セイタカアワダチソウ※、ヨモギ、スギナ、ホトケノザ、ムラサキカタバミ※、タチツボスミレ、スミレ、アレチノギク※ ほか
鳥 類	キジバト、ハシボソガラス、シジュウカラ、ツバメ、ヒヨドリ、ムクドリ、スズメ
昆虫類	アオマツムシ※、カネタタキ、オンブバッタ、キマダラカメムシ※、ナナホシテントウ、ルリカミキリ、セスジユスリカ、ホソヒラタアブ、オオスカシバ、ナガサキアゲハ※、アゲハ、アオスジアゲハ、モンシロチョウ、クロヤマアリ、コガタスズメバチ ほか

※外来種

（個人の敷地内に断りなく立ち入らないようご注意ください。）

多摩川（調査地⑩）



河川敷の小さな流れ



アレチウリ等が繁茂

<特性>

- ・ 水辺（流れ・たまり）や樹林地、草地、礫河原等多様な自然環境が残されており、自然環境の調査でも、確認された種の総数・希少種数ともに、市内で最も多かった。非常に重要な自然拠点となっている。
- ・ 礫河原という特定環境に依存するカワラバッタ等も確認されている。
- ・ ニヶ領宿河原堰付近は、年間を通じて多くの鳥が見られる場所となっている。冬期は越冬のために渡ってくるカモ類が、夏期はコアジサシやツバメ等が見られ、カワウ、コサギ、カルガモ等は通年確認されている。
- ・ アレチウリやオオフサモ、オオカワチシャ等、多くの外来種*が確認されている。市民との協働による駆除活動の継続、流域の他自治体や国土交通省と連携した効果的な駆除が必要である。
- ・ 人による利用頻度が高いほか、リードなしでのイヌの散歩やノラネコも多く確認されており、ホンドタヌキやホンドイタチをはじめとする野生動物の生息に影響を与えている可能性がある。

表 2.13 多摩川で見られた主な生きもの ※自然環境調査（p20-24 参照）結果より抜粋

植 物	エノキ、コナラ、オニグルミ、タチヤナギ、ヤマハギ、アズマネザサ、ヨモギ、カラスウリ、ノイバラ、センニンソウ、ヨシ、オギ、ミゾソバ、ツルボ、ナワシロイチゴ、アレチウリ※、セイタカアワダチソウ※、シナダレスズメガヤ※、オオフサモ※、ミズヒマワリ※、オオカワチシャ※、アセビ、カサスゲ ほか
哺乳類	アズマモグラ、アブラコウモリ、ホンドタヌキ、ホンドイタチ★
鳥 類	コガモ、カワウ、コアジサシ★、セグロカモメ、カイツブリ★、カンムリカイツブリ★、ダイサギ★、チュウサギ★、ヒメアマツバメ★、イソシギ★、イカルチドリ★、ツミ★、チョウゲンボウ★、モズ★、コシアカツバメ★、セグロセキレイ★、ウグイス ほか
爬虫類	ミシシippiaアカミミガメ※、ニホンカナヘビ★、ジムグリ★、ニホンマムシ★
両生類	ウシガエル※、ニホンアカガエル★
昆虫類	ハグロトンボ、アジアイトトンボ、シオカラトンボ、エンマコオロギ、コバネイナゴ、オオカマキリ、ヒメアメンボ、キボシカミキリ※、アオスジアゲハ、ベニシジミ、キアシナガバチ、ニホンミツバチ、セイヨウミツバチ※ ほか
水生動物	コイ、オイカワ、ウグイ、ドジョウ☆、ウキゴリ、スミウキゴリ、スジエビ、アメリカザリガニ※ ほか

☆環境省レッドデータブック掲載種／★東京都レッドデータブック掲載種／※外来種
 (注) 水生動物の調査範囲は河川敷内の水路や“たまり”のみです。

※「*」の付いた用語は、資料編に用語解説を掲載しています。

2.3 生物多様性保全に係る市内の活動

狛江市では、市ホームページやツイッター、「こま eco 通信」の発行等、市民団体や教育機関との連携による環境に関する情報発信を行っています。市民による環境保全への関心も高く、市内の自然拠点や公園等を中心に、自然環境に関する保全・管理活動、体験学習、情報発信等が活発に行われています。

表 2.14 狛江市における取組の例

<p>こまエコまつり</p> <p>毎年 6 月の環境月間にあわせて開催する、狛江市主催の環境に関するお祭り。市民団体、関連企業、東京都、狛江市等により広く環境保全をテーマとするブース出展が行われ、様々な情報発信・交流等が行われる。</p>	
<p>こま eco 通信</p> <p>狛江市が環境施策や環境に関するイベント情報を発信するため平成 28 (2016) 年 5 月に創刊、年 3 回、市内全戸に配布している。</p>	
<p>生きもの調査会</p> <p>多摩川や野川において、市民団体と狛江市との協働によって生きものの観察会や自然体験のイベントを開催し、確認された生きものの記録を行っている。</p>	
<p>狛江市小学生環境サミット</p> <p>2 年に 1 回、市内小学校の児童たちによる環境学習活動発表の場として開催。次世代の地球環境を担う小学生が発表を通じて環境について理解を深め、具体的行動を起こすきっかけとすることを目的としている。</p>	
<p>狛江市環境表彰制度</p> <p>環境保全に関する取組をより推進するため、環境保全に関する取組を行った個人、事業者、団体等のうち、特に顕著な成果をあげた方を表彰している。</p>	

2.4 生物多様性に関する市民意識

平成 30（2018）年度に「生物多様性に係る市民アンケート」を実施し、生物多様性に関する市民意識の把握を行いました。アンケートは、一般市民（住民基本台帳から無作為抽出した 18 才以上の市民 1500 名）及び、小中学生（市内小中学校在学の小学 4 年生（587 名）・中学 2 年生（454 名））を対象に実施しました。

1) 自然への満足度

狛江市の自然については、47.1%が「都会にしては自然が多く満足」と現状について満足していると回答しました。「都会にしては多いが、もう少し増えるとよい」との回答をあわせると、74.4%が「都会にしては自然が多い」と感じており、「自然が少ないが都会なので仕方ない」・「自然が少ないので増やしてほしい」といった「自然が少ない」と感じている人の合計 14.0%を大きく上回りました。

まとまった樹林地等は少ない狛江市ですが、多摩川、野川の存在や、駅前に狛江弁財天池特別緑地保全地区があること、また緑道や街路樹等、小規模ながらもまちなかで緑を目にする機会が多いことが、自然が多いと感じる要因になっているものと推測されます。

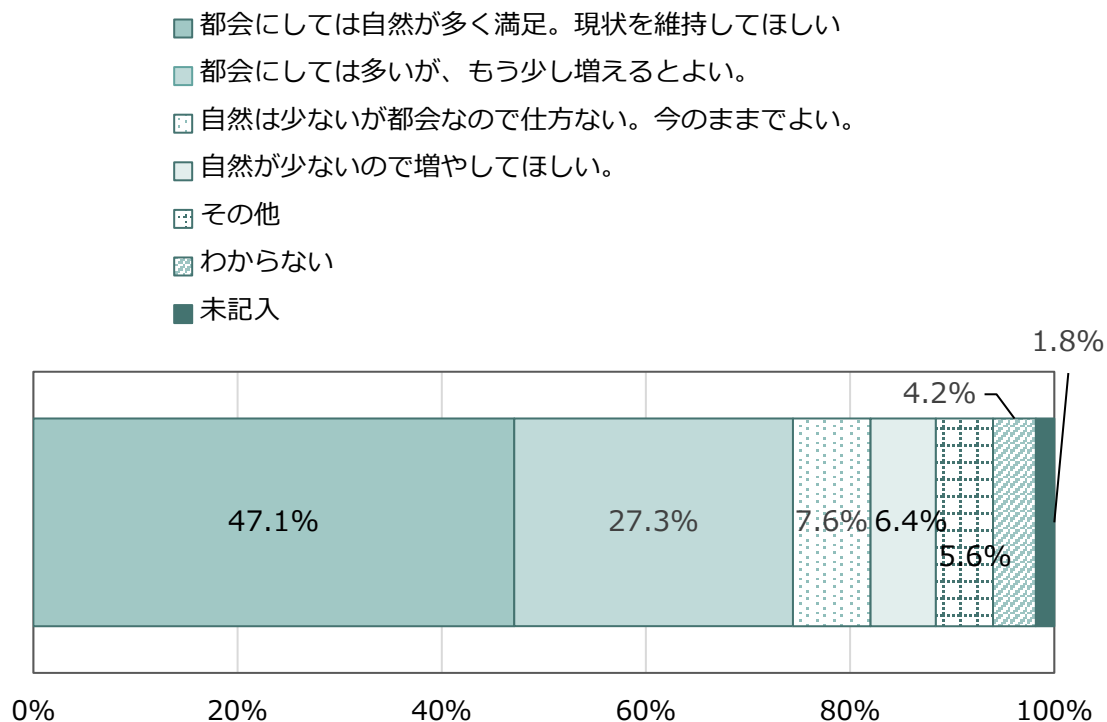


図 2.12 「狛江市の自然環境の現状をどのように感じていますか？」 (n=550)

2) 保全・活用すべき自然環境

「狛江市内の自然環境（自然資源）として、特に保全・活用すべきと思う場所はどこですか。」との設問では、多摩川が82.0%と他を大きく引き離して圧倒的に多く選ばれる結果となりました。多摩川が、狛江市の自然環境の象徴的な場所であることが伺われます。次いで、野川（51.5%）、狛江弁財天池特別緑地保全地区（40.0%）が多く選ばれているほか、公園では、西河原自然公園（28.0%）、西河原公園（22.9%）、前原公園（20.2%）が保全・活用すべき自然として選ばれました。

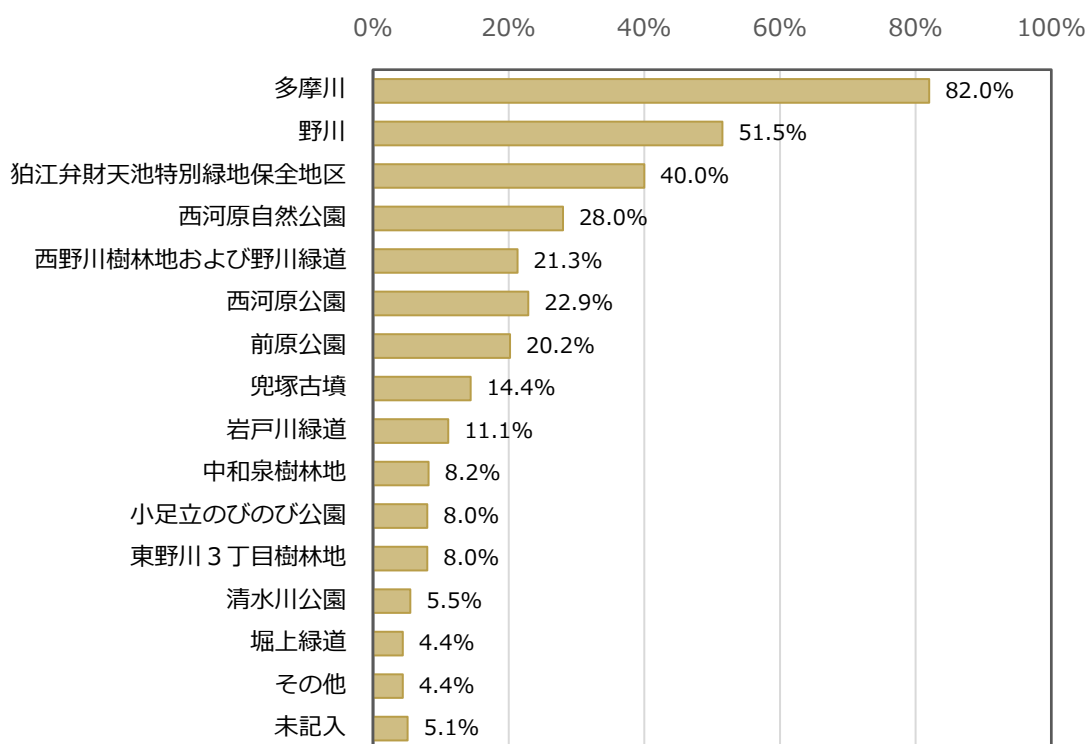


図 2.13 「特に保全・活用すべきと思う自然環境はどこですか？」(n=550)

3) 「生物多様性」の認知度

「生物多様性」という言葉の認知度は、「意味も含めて知っていた」「聞いたことはあるが意味は知らなかった」「知らなかった」がいずれも30%余と、ほぼ同じ割合でした。

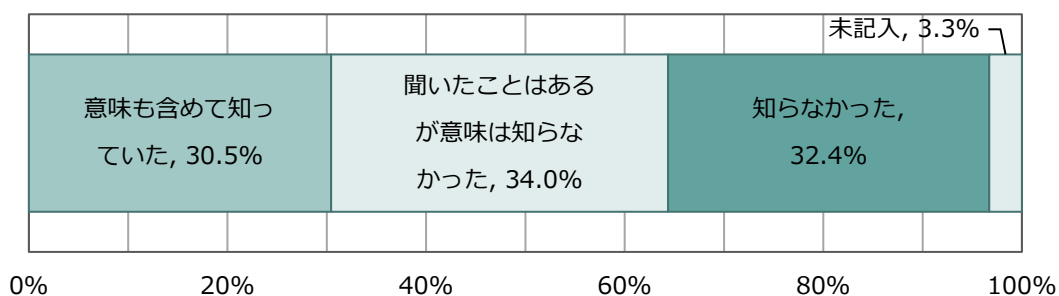


図 2.14 「『生物多様性』という言葉について知っていますか？」(n=550)

4) 小・中学生が遊びに行く自然環境

小・中学生アンケートでの「あなたがよく行く『自然のある場所』はどこですか。」という設問では、小・中学生ともに、前原公園（とんぼ池公園）と野川が、他の場所に差をつけて多く選ばれています。また、中学生は小学生よりも各場所の選択率が全体的に低く、「どこにも行かない」との回答が36.8%と非常に高く、年齢が上がるにつれて、日常的に自然に触れる機会が減り、自然離れが進んでいることが伺われます。

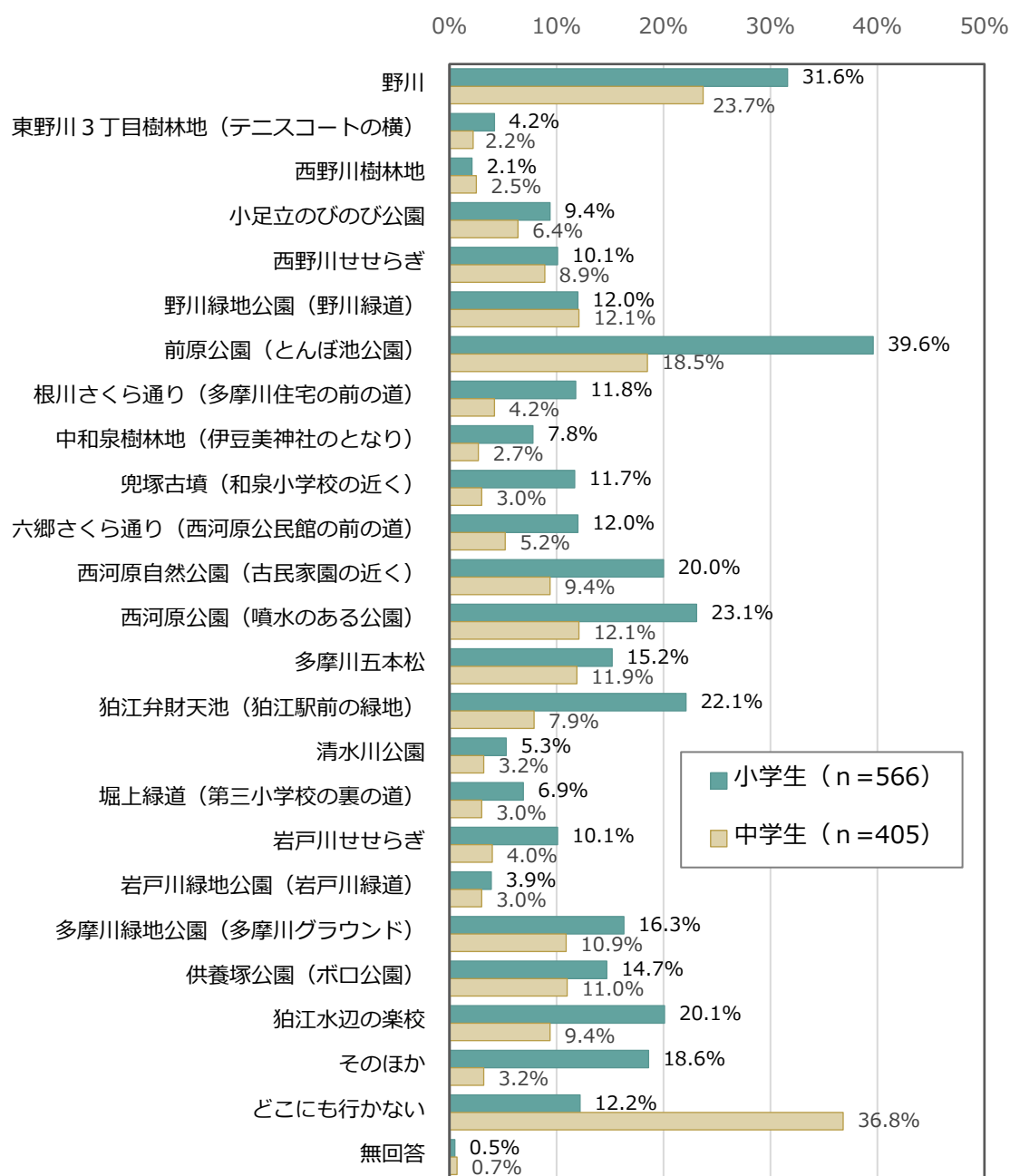


図 2.15 「あなたがよく行く『自然のある場所』はどこですか？」

2.5 狛江市の自然と生物多様性に係る課題

現在の狛江市の「自然」は、知床や小笠原のような原生自然でも、奥多摩のような奥山の自然でも、かつての武蔵野に広がっていた里山の自然でもありません。狛江市の「自然」は、何らかの人の管理のもとで成立している緑や水辺で構成される「都市生態系」です。

狛江市で人の暮らしと自然との共存をめざす上で、次のような課題があります。

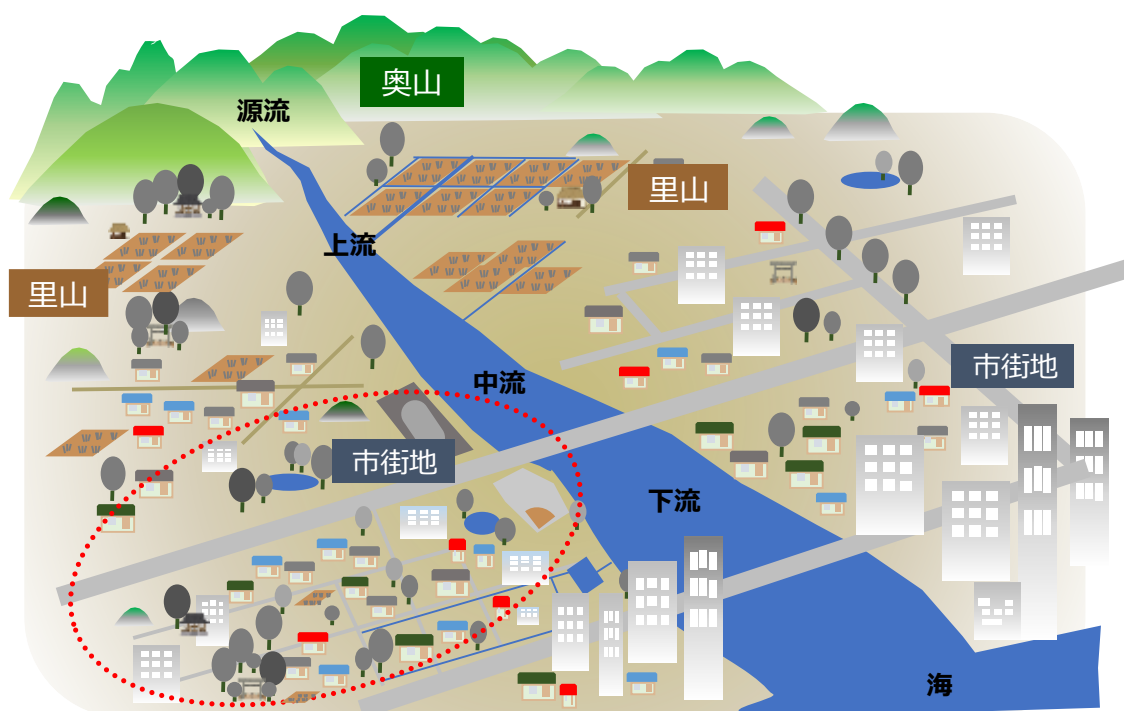


図 2.16 狛江市の自然の位置づけのイメージと市内の自然環境

■残された緑・まとまった緑が少ない

狛江市は、「都会にしては緑が多い」と感じる市民が多く、実際の緑等の自然の量よりも多く感じる理由としては、市の自然環境のシンボルとなっている多摩川のまとまった自然空間があること、狛江弁財天池特別緑地保全地区が駅前であり日常の風景として市民や来訪者に認識されていること、昔の川筋が野川緑道・岩戸川緑道として連続した緑地として整備されており市民の日常的な通り道、散歩道等として利用されていること、市役所や社寺林、街路樹や古墳、個人宅や事業所の生け垣や敷地内の緑等、小規模ながらもまちなかの身近な至るところに緑が多くあること、そして、樹林地や街路樹を構成する木々は年月の経過に伴う高木が多くボリュームを感じられること、等が挙げられます。

航空写真 (p17) や緑被分布図 (p18) を見ても分かるように、狛江市は市街地化が進んだまちであり、緑地や水辺等の自然環境の面積が少なく、生きものが暮らせるまとまった自然、市全体としての面積・ボリュームが少ないのが課題となっています。

■自然環境と暮らしの調和が必要

狛江市では、日常的に身近な自然拠点や緑道等を利用する市民が多く、身近で水や緑に触れ合えるのが魅力となっています。そのため、人が利用する空間としての安全性・快適性への要求が高い一方で、高い頻度による利用が野生の生きものに与える影響やプレッシャーを大きくしています。

人による利用や安全性・快適性と、野生の生きものの生息・生育とが調和する空間として、自然環境を整備・維持管理・活用していく必要があります。また、身近な生きものについて知るとともに、野生の生きものと共存するための、ちょっとした知恵や思いやりを育てていくことも大切です。

■非常に多くの外来種*が確認されている

市内の自然環境調査から、昔当たり前に身近にいた生きものの確認が減る一方で、非常に多くの外来種が生息・生育していることが確認されました。中には、ハクビシンやアレチウリ等のように、狛江市に元からいた生きものの生息・生育をおびやかしたり、農産物被害や生活公害を引き起こしたりする種も出てきています。

外来種は、宅地・道路の整備やそこでの人間活動に伴って持ち込まれるため、市街地化の進んだまちでは外来種の増加が共通する特徴となっています。外来種も命ある存在であることを理解しつつ、地域の自然を守るために、積極的に対策をはかっていくことが必要です。

※「*」の付いた用語は、資料編に用語解説を掲載しています。

■ 持続可能な保全・活用が必要

全国的に人口減少傾向が続くなか、狛江市では、僅かながらも増加傾向にあります。これは、都心からの利便性ととも、身近に自然を感じられる点が魅力となっています。将来的には人口減少に転じることが推測されており、まちの魅力としての自然環境の持続可能な保全・活用の推進が、ますます重要になっています。

■ 自然環境の保全・維持管理への市民理解と協働の推進が必要

狛江市は、人口約8万人の小さな都市ではありますが、多くの市民団体・グループによる自然環境の保全・維持管理や体験学習活動等が活発に行われており、行政との連携・協働による取組も盛んです。また、多摩川や狛江弁財天池特別緑地保全地区等の自然拠点を空間として活用したイベントやレクリエーションも行われており、自然が身近にある暮らしは、様々な世代の関心を引き付けています。

一方で、「生物多様性」という言葉の市民の認知度は高くありません。生物の多様性は、私たちの暮らしと見えるところ、見えないところで深く関係しているため、私たち一人ひとりの関心や理解・関わりが、狛江市域の自然、多摩川流域の自然、ひいては世界の自然を守るかどうかの「カギ」であり、重要です。

狛江市における暮らしと自然の調和、自然環境の持続可能な保全・活用を進めるためには、私たち一人ひとりの関心と知識とが結び付き、地域の自然への理解が深まり、自発的な関わりが広がっていくことが必要です。